「石巻専修大学　研究紀要」第22号　109－123　2011年３月

美的特性に関する傾性理論
その美的特性実在論としての可能性を探る

松﨑　俊之

Dispositional Theory about Aesthetic Properties: Investigation into Its Possibility as an Aesthetic Property Realism

Toshiyuki MATSUZAKI

0　はじめに

たとえば、すみれ草のもつ床しさや秋の夕暮の侘しさ、あるいは大売り出しでにぎわう商店街の活気やしめやかに営まれる祭儀の厳粛さ、さらには、歓楽街を彩るネオンの毒々しさ、無邪気に戯れる子犬たちの愛くるしさ、霊山にみなぎる神々しさなど、それこそ挙げ出したら切りがないが、これらのものは、ある側面から捉えるならば、いずれも美的特性（aesthetic properties）に数えられるものと言える[(1)]。

こうした美的特性を実在する世界の構成要素に含める、換言するならば、美的特性を世界に帰属しうる特性と見なす立場が美的特性に関する実在論（realism）であるのに対し、美的特性を実在する世界の構成要素に含めない、換言するならば、美的特性を世界に帰属しうる特性とは見なさない立場が美的特性に関する非実在論（non-realism）であると、まずは暫定的に捉えておくことができる。

後者の美的特性非実在論についてさらに詳しく見るならば、それは、美的特性の存在それ自体を認めない「消去主義（eliminativism）」もしくは「幻覚主義（illusionism）」[(2)]、美的特性を主観に帰属される特性、すなわち主観的特性と見なす「唯心論（mentalism）」、美的特性とは主観的反応を外界の対象に投影したものに過ぎないと見なす「投影主義（projectivism）」[(3)]の大きく三つに分類されることになる。

一方前者の美的特性実在論に関して、その可能的類型を色彩実在論の標準的類型分類[(4)]をもとに考えるとするならば、美的特性実在論の可能的類型としては、非還元的美的特性実在論に分類される「原始主義（primitivism）」、還元的美的特性実在論に分類される「物理主義(physicalism)」[(5)]および「傾性主義（dispositionalism）」[(6)]の三つが挙げられることになる。

これら三つの可能的類型のなかで、美的特性実在論としてもっとも見込みのあるものと一般に見なされているのが、傾性主義であると言ってよかろうが、本稿の課題は、この傾性主義の立場から美的特性にアプローチを試みる傾性理論を取り上げ、これを批判的に再構成しながらつぶさに検討することで、その美的特性実在論としての可能性を探ることにある。

1　美的特性に関する傾性理論の概要

1.1　傾性概念

美的特性に関する傾性理論（以下ではこれを「美的特性傾性理論」と呼ぶことにする）の概要を捉えるにあたって、最初に傾性理論一般にとってその中心概念をなす「傾性（disposition）」について押さえておく必要があるが、ここでは傾性のひとつに数えられる「水溶性（water-solubility）」を例に傾性概念についてその基本的理解を示すことにしたい[(7)]。

傾性とは対象のもつ潜在的な性質を意味する。たとえば「食塩（＝塩化ナトリウム NaCl）は白い」と言われるときの「白い」という語が食塩のもつ顕在的性質を表わしているのに対し、「食塩は水溶性をもつ」と言われるときの「水溶性」という語は、食塩のもつ潜在的性質を表わしている。あるものがある顕在的性質をもつということは、それが現にある特定の状態にあるということを意味するが、一方、それがある傾性をもつということは、それが現にある特定の状態にあるということを意味するのではなく、ある特定の条件のもとに置かれたとするならば、それはある特定の状態になる（そうした傾向がある）ということを

意味する。したがって、「食塩は水溶性をもつ」という命題は、「食塩はある条件（もしくは条件群）のもとで水に溶ける傾向をもつ」ということを意味することになる。

以上の点を踏まえて、傾性概念一般について捉えるならば、傾性とは、対象が潜在的にもつ、ある条件（もしくは条件群）のもとである特定の事態を引き起こす（傾向的）性質ということになる。

傾性概念の要点として、ここでとくに銘記しておかなければならないのは、「水溶性」が食塩のもつ物理的特性にその基盤をもつことからも明らかなように、傾性とはあくまで対象のもつ物理的特性をその基盤とする実在的性質であるという点である。したがって、傾性をその中心概念に据える傾性理論は、それ自体が実在論に与するものと考えられるのである[8]。

1.2 美的特性傾性理論の定式化

さてつぎに美的特性傾性理論を取り上げ、それがその基本線においていかなる理論構制をもつものなのか、その概要の解明に努めることにしたいが、ここではよりプリミティブなものからより高度に展開されたものにいたるまで、美的特性傾性理論を段階的に定式化しながら、それらを順に検討してゆくことで、この課題に応えることにする[9]。

1.2.1 定式 F1 および定義 D1

美的特性傾性理論をそのもっともプリミティブなかたちで定式化するならば、それは F1 のようなものとなる。

F1 対象Oは美的特性Pをもつ≡対象Oは条件Cのもとで P として現出する傾性をもつ（「≡」は論理的等値を表わす）。

この F1 に関しては、以下の二つの注解を付しておく必要がある。

(1) F1 の右辺は、「対象Oが条件Cのもとに置かれたとするならば、対象O はPとして現出する」という一種の仮定条件文（subjunctive conditional sentence）をその下敷きにしていると言え、したがって、ここでの「対象OがPとして現出する」という事態は、顕在的・現実的な事態ではなく、あくまで潜在的・可能的な事態であると考えられる。また、この仮定条件文の前件と後件との間には、一種の法則的連関を認めることができる。

(2) F1 の右辺にあるPは、ジョンストンの言葉を用いれば、それをある種の「現象的見え（phenomenal look）」として、あるいは一般化するならば、一種の現象的特性（phenomenal properties）として捉えることも可能である（cf. Johnston [1997]:175）。

さて一方で、この定式 F1 に対応するかたちで美的特性の定義を与えるとするならば、それは D1 のようなものとなろう。

D1 美的特性P＝def. 条件Cのもとで対象OがPとして現出する傾性（「＝」を挟んで左辺が被定義項に、また「def.」以下が定義項にあたる）

この F1 および D1 を具体的に理解するために、いま試みに、美的特性のひとつの事例として「優雅さ（grace, gracefulness）」を取り上げ、これを F1 および D1 のもとで捉えてみるならば、Ex.F1 および Ex.D1 のようになるであろう。

Ex.F1 対象Oは優雅である≡対象Oは条件Cのもとで優雅なものとして現出する傾性をもつ。

Ex.D1 優雅さ＝def. 条件Cのもとで対象Oが優雅なものとして現出する傾性

1.2.2 定式 F2 および定義 D2

F1 においては、美的特性が何に対してどこに現出するのか、その現出の場が特定されていなかったが、これを特定するかたちで F1 を捉え返すならば、F2 が得られる。

F2 対象Oは美的特性Pをもつ≡対象Oは条件Cのもとで観者Vに対してPとして現出する傾性をもつ。

また、定式 F2 に対応するかたちで美的特性の定義を与えるならば、D2 が得られる。

D2 美的特性 P＝def. 条件 C のもとで対象 O が観者 V に対して P として現出する傾性

先と同様「優雅さ」を例に、F2 と D2 を具体的に捉えるならば、Ex.F2 および Ex.D2 のようになろう。

Ex.F2 対象 O は優雅である≡対象 O は条件 C のもとで観者 V に対して優雅なものとして現出する傾性をもつ。

Ex.D2 優雅さ＝def. 条件 C のもとで対象 O が観者 V に対して優雅なものとして現出する傾性

1.2.3　定式 F3 および定義 D3

F1 および F2 で問題とされる条件 C が観者 V に帰属されることない純然たる外的条件であるとするならば、当然のことながら一方で、観者 V の特定化も必要とされよう。しかるべき条件（たとえば、ある種の素質や能力、あるいはしかるべき背景知識や経験等を備えているという条件）を充たした観者を仮に「理想の観者（ideal viewer）」（略して IV）と呼ぶとするならば、これをその定式のうちに組み込んだ F3 が得られる（なお、理想の観者を組み込むことにともない、条件 C は純然たる外的条件を指すことになるが、この点を明示するため、以後条件 C を「観察条件 C」と呼ぶことにする。因みに、ここで言う「観察条件 C」とは、対象を適切な仕方で知覚するための条件を意味する。たとえば、照明が適切であることや過度に雑音が混入していないこと、あるいは対象に対して適切な距離や角度で接していること、さらに一般的には知覚刺激の量が過大であったり過小であったりしないことなどがそれにあたる）[10]。

F3 対象 O は美的特性 P をもつ≡対象 O は観察条件 C のもとで理想の観者 IV に対して P として現出する傾性をもつ。

また、定式 F3 に対応するかたちで美的特性の定義を与えるならば、D3 が得られる。

D3 美的特性 P＝def. 観察条件 C のもとで対象 O が理想の観者 IV に対して P として現出する傾性

この F3 と D3 を、先と同様「優雅さ」を例に捉え返すならば、以下の Ex.F3 および Ex.D3 のようになろう。

Ex.F3 対象 O は優雅である≡対象 O は観察条件 C のもとで理想の観者 IV に対して優雅なものとして現出する傾性をもつ。

Ex.D3 優雅さ＝def. 観察条件 C のもとで対象 O が理想の観者 IV に対して優雅なものとして現出する傾性

1.2.4　定式 F4 および定義 D4

「対象 O が P として現出する」という事態をさらに分節化し、これをある種の経験的反応（empirical response）の惹起として捉え返すならば、F4 が得られる。

F4 対象 O は美的特性 P をもつ≡対象 O は観察条件 C のもとで理想の観者 IV のうちにある特定の経験的反応 R を引き起こす傾性をもつ。

この F4 に関しては、以下の点をとくに指摘しておかなければならない。すなわち、F4 の右辺にある「経験的反応 R」は、これを快・不快の感情のような感情反応にのみ限定して捉えてはならず、実質的経験内容をも含んだかたちでこれを広く捉える必要があるという点である。

さて先と同様、定式 F4 に対応するかたちで美的特性の定義を与えるならば、D4 が得られる。

D4 美的特性 P＝def. 観察条件 C のもとで対象

Oが理想の観者IVのうちにある特定の経験的反応Rを引き起こす傾性

また、この F4 と D4 を「優雅さ」をもとに例示するならば、以下の Ex.F4 および Ex.D4 が得られよう。

Ex.F4 対象Oは優雅である≡対象Oは観察条件Cのもとで理想の観者IVのうちにある特定の経験的反応Rを引き起こす傾性をもつ。

Ex.D4 優雅さ＝def. 観察条件Cのもとで対象Oが理想の観者IVのうちにある特定の経験的反応Rを引き起こす傾性

1.2.5 定式 F5 および定義 D5

F4 においては、美的特性Pと経験的反応Rとの関係が不明のままであったが、この点を明示するかたちで F4 を捉え返すならば、 F5 が得られる。

F5 対象Oは美的特性Pをもつ≡対象Oは観察条件Cのもとで理想の観者IVのうちに美的特性Pと直接的に関連づけられる（たとえばOがPに見える、あるいはOがPであると感じられる）ような経験的反応Rを引き起こす傾性をもつ。

F5 から明らかなように、経験的反応Rは美的特性Pを表象する（represent）、事態を逆に捉えるならば、美的特性Pは経験的反応Rにとってその志向対象（intentional object）をなすと言える。

この F5 を「優雅さ」のもとに例示するならば、 Ex.F5 が得られる。

Ex.F5 対象Oは優雅である≡対象Oは観察条件Cのもとで理想の観者IVのうちに優雅さと直接的に関連づけられる（たとえばOが優雅に見える、あるいはOが優雅に感じられる）ような経験的反応Rを引き起こす傾性をもつ。

さて、ここでもまた先と同様、定式 F5 に対応するかたちで美的特性の定義を与えるならば、 D5 が得られる。

D5 美的特性P＝def. 観察条件Cのもとで対象Oが理想の観者IVのうちに美的特性Pと直接的に関連づけられる（たとえばOがPに見える、あるいはOがPであると感じられる）ような経験的反応Rを引き起こす傾性

この D5 を、「優雅さ」をもとに例示化したものが、つぎの Ex.D5 である。

Ex.D5 優雅さ＝def. 観察条件Cのもとで対象Oが理想の観者IVのうちに優雅さと直接的に関連づけられる（たとえばOが優雅に見える、あるいはOが優雅に感じられる）ような経験的反応Rを引き起こす傾性

以上、美的特性傾性理論を段階的に定式化しながら検討することで、その基本的理論構制の解明に努めてきたのであるが、そこで得られた各種定式および定義のうち、ここではそのもっとも完成された定式であると言える F5 を美的特性傾性理論の標準的定式として、また F5 に対応する D5 をその標準的定義として位置づけることにする（ただし、以下の議論においては、必要に応じて他の定式および定義も適宜使用する）。

1.3 美的特性傾性理論の利点[11]

それでは、1.2に定式化したような美的特性傾性理論は、いかなる利点を有するのであろうか。ここでは傾性理論がもつと思われる利点を箇条書きに挙げることで、それらを簡単に確認しておくことにする。

(1)傾性理論によれば、「美的特性とは対象のもつ特性である」、別言するならば、「美的特性は対象に帰属される特性である」という美的特性に関するわれわれの常識的理解を保持することができる。ただしそれは、傾性概念を導入することで、この常識的理解を再解釈することをとおしてであ

る。

(2)傾性理論は「基本的な物理的諸対象、たとえば、原子、陽子、中性子、電子、クォーク等は美的特性をもたない」という科学の主張を真摯に受け入れる余地をもつ。すなわち傾性理論は、基本的な物理的諸対象それ自体は美的特性をもたないにせよ、それらがしかるべき仕方で構成されるとするならば、そうして生み出された通常（サイズ）の対象は、われわれのうちに美的特性と直接的に関連づけられるような経験的反応を引き起こす傾性をもちうると考えるのである。

(3)傾性理論によれば美的特性に関する正しい知覚と誤った知覚とを区別できる。

この点について、1.2.2 に挙げた定式 F2 「対象 O は美的特性 P をもつ≡対象 O は条件 C のもとで観者 V に対して P として現出する傾性をもつ」に即して、より具体的に説明するならば以下のようになる。

同一の対象に各人が異なった美的特性を帰属する場合、たとえば同一の対象 O に対して観者 A が P という美的特性を帰属する一方で、観者 B は Q という美的特性を帰属する場合、仮に、観者 A が標準的な条件のもとで対象 O を知覚しており、かつ対象 O において問題となる美的特性に、直接・間接に関与する他の諸特性（すなわち美的特性がそれに依存する基盤特性）を正しく受け取っているのに対し、観者 B が標準的な条件のもとで対象 O を知覚していないか、あるいは対象 O において問題となる美的特性に直接・間接に関与する他の諸特性を見逃す、またはそれを誤って受け取っているとするならば、観者 A による美的特性 P の帰属が正しく、観者 B による美的特性 Q の帰属は誤っているということになる。

このように美的特性の帰属に関して正誤を区別できるということは、言葉を換えるならば、傾性理論によれば、美的特性に関する間主観的同意（intersubjective consent）を認めることができるということを意味する。

(4)傾性理論による美的特性の理解は、客観的側面と主観的側面との両面をあわせもっており、その意味で、この理論は、美的特性を世界と人間とのあいだの根源的連関のうちに明確に位置づけるものと言える。

あらためて言うまでもなく、こうした特徴は、傾性理論が本質的に関係主義（relationalism）にもとづくものであるという点に起因する。

2　美的特性傾性理論の問題点

1.3 に挙げたように、美的特性傾性理論には数々の利点があるのだが、その一方で、いくつかの問題点も指摘されている。ここでは傾性理論に向けられた主要な批判をまずは見ておくことにしたい。

2.1　傾性理論に対する批判

2.1.1　第一の批判

1.2 に示した美的特性に関する定義からも明らかなように、傾性理論では、美的特性とは要するに傾性であるとされるのであるが、美的特性は、対象のもつ形態（第一性質）や色彩（第二性質）[12] がそうであるように、原初的（primitive）・顕現的（occurrent）な特性であって、傾性的なものには見えない、というのが第一の批判である。言葉を換えれば、1.1 に見たように、傾性とは対象のもつ潜在的性質であるのに対し、美的特性は紛れもなく顕在的性質である以上、美的特性を傾性として捉える傾性理論は支持しがたいという批判である[13]。

2.1.2　第二の批判

第二の批判は、傾性主義による美的特性の定義は、循環論法に見えるというものである[14]。

この点は、1.2.1 に示した D1 「美的特性 P＝def. 観察条件 C のもとで対象 O が P として現出する傾性」からただちに看て取れる。D1 に見られるように、ここでは定義項に被定義項 P が現れており、この点に明らかに循環が認められるのである。

2.1.3　第三の批判

1.2 に示した傾性理論による美的特性の定義には、その定義項のうちに「条件 C」もしくは「観察条件 C」が現れ、さらに D3 以降の定義においては、これに加えて「理想の観者 IV」が現れるが、第三の批判とは、この「（観察）条件 C」

と「理想の観者IV」を一定の原則にしたがって妥当な仕方で（つまり、恣意的ではない仕方で）特定することはできないという批判である[15]。

仮にこの批判が主張するように、「（観察）条件C」と「理想の観者IV」が特定されえないとするならば、傾性理論による美的特性の定義は、少なくとも厳密な意味での定義としては、不適格なものと断ぜられることになる。

2.2 批判に対する応接

上に見たように、美的特性傾性理論に関しては、いずれも看過することのできない重大な批判が寄せられているのであるが、これらの批判に対してはいかに応えるべきなのだろうか。上に挙げた三つの批判のうち第一の批判に対する応接はひとまず措いて、ここではまず第二と第三の批判に対する応接を検討することにする（第一の批判に対する応接については、その批判の重大性に鑑みて、節をあらためて3で論ずることにする）。

2.2.1 第二の批判に対する応接

傾性理論に対する第二の批判、すなわち傾性理論による美的特性の定義は循環論法であるという批判に対する応接としては、「非同一性論法（nonidentity argument）」と「意味論的非空虚論法（semantical non-vacuum argument）」という二種の議論が挙げられる。

2.2.1.1 非同一性論法

ここで「非同一性論法」と名づける議論を D1 「美的特性 P＝def. 観察条件Cのもとで対象OがPとして現出する傾性」に即して捉えるならば、要するにこの論法は、D1 の定義項に現れるPと被定義項に現れるPとは実は別個のものであると主張するものと言える。

この非同一性論法を採る代表的論者としてマーク・ジョンストンが挙げられる。そこで以下では、この非同一性論法について、彼の議論（Johnston [1997]:175）を下敷きにして見てゆくことにしたい。

いま仮に D3 「美的特性 P＝def. 観察条件Cのもとで対象Oが理想の観者IVに対してPとして現出する傾性」をもとに美的特性に関する傾性主義的定義を捉えるとするならば、この D3 においてPがその被定義項と定義項の両者に現れることが循環性の疑いを引き起こすことになる。しかしながら、この傾性主義的定義は、ある関係的特性、すなわち観察条件Cのもとにある理想の観者IVに対してPであるということを、観察条件Cのもとでの理想の観者IVと対象Oとの間に別の関係を打ち立てる力能（power）もしくは傾性として分析する。この関係は、観察条件Cのもとにある理想の観者IVに対して対象Oが現象的にPに見える、あるいはPに感じられるという関係である。この後者の関係は、観察条件Cのもとで理想の観者IVにとって対象OがPに見える／感じられるということの、観察条件Cのもとにある理想の観者IVに対する関係ではない。したがってこの関係は、それがいかなるものあろうと、対象OがPに見える／感じられるような傾性をもつように（標準的に）見える／感じられるということの、観察条件Cのもとにある理想の観者IVに対する関係ではない。傾性主義的定義は美的特性を、対象のもつある種のタイプの経験的覚知（empirical awareness）、すなわちある種の「現象的見え／感じ（phenomenal look/feeling）」を生み出すような傾性として扱う。部分的にせよ、こうした「現象的見え／感じ」を美的特性それ自体の名と同じPという記号表記で特徴づけることが、恐らくは混乱を招く原因となっているのであろう。こうしたミスリーディングをいささかなりとも避けようとするならば、D3 は D3-1 のように改変されることになる。

D3-1 美的特性 P＝def. 観察条件Cのもとで対象Oが理想の観者IVのうちに対象Oに関するある種の経験的覚知（現象的見え／感じ）を生み出す傾性

以上が、ジョンストンの議論の骨子を、ここでの論脈、すなわち美的特性傾性理論という枠組みのもとに捉え返したものであるが、ジョンストンが循環の見かけを解消するためにあらたに提案する傾性主義的説明の改訂案を踏まえた D3-1 は、そこで問題となる経験的覚知が対象Oに関連づ

けられているという点を除けば、先にわれわれが示した D4 「美的特性 P＝def. 観察条件 C のもとで対象 O が理想の観者 IV のうちにある特定の経験的反応 R を引き起こす傾性」と基本的に同型の定義であると見なされる。したがって、D3-1 がそうであるのと同様に、D4 もまた循環を免れていると言える。

さらに付言するならば、D4 を改訂した D5 「美的特性 P＝def. 観察条件 C のもとで対象 O が理想の観者 IV のうちに美的特性 P と直接的に関連づけられる（たとえば O が P に見える、あるいは O が P であると感じられる）ような経験的反応 R を引き起こす傾性」は、経験的反応 R を美的特性 P と関連づけることによって、またしても定義項のうちに P という記号表記を導入することになってしまっているが、定義項の括弧内に現れる「P」は、あくまである種の経験的覚知、すなわち現象的見え／感じを指し示すものであって、美的特性それ自体を指すものではないことから、この D5 もまた循環を免れていると言える[16]。

2.2.1.2　意味論的非空虚論法

ときに美的特性傾性理論はそれが内蔵する循環性ゆえに意味論的に空疎であるとの批判を受けることになるが、この批判に応えるのが、ここで言う「意味論的非空虚論法」である。

意味論的非空虚論法によれば、美的特性傾性理論が仮に循環を孕むものであったとしても、だからといって傾性主義にもとづく説明がまったく意味空疎なものであるというわけではなく、美的特性に関して少なからぬ情報を含むものと主張されることになる。

この点について以下では、D2 「美的特性 P＝def. 条件 C のもとで観者 V に対して P として現出する傾性」をもとに考えてみよう。

たしかに D2 からは、美的特性 P の具体的内実については何ら情報も得ることはできないが、だからといって D2 が美的特性一般についての情報をまったく欠いているということにはならない。事実われわれは D2 から美的特性に関してたとえば以下のような情報を得ることができる。

(1)美的特性は、観者との間に必然的な関係を切り結ぶ関係的特性（relational properties）としての側面をもつ。

(2)美的特性は、観者に対して現象する現象的特性（phenomenal properties）としての側面をもつ。

(3)美的特性は、ある条件のもとで成立する条件被支配的特性（condition governed properties）としての側面をもつ。

そして最後に

(4)美的特性は、傾性である。

これら四つの特徴づけは、美的特性について理解するにあたって少なからぬ重要性をもつと言えようが、こうした特徴づけが傾性理論によって与えられるとするならば、美的特性に関する傾性主義的説明がまったく意味空疎なものであるとの批判は的外れなものと言わなければならない[17]。

2.2.2　第三の批判に対する応接

第三の批判に対する応接としては、われわれの定式にある「観察条件 C」と「理想の観者 IV」を包含するかたちで「標準的観察条件（standard observation conditions=SOC）」の設定を試みる、ゼマックによる果敢な取組みも存在するが（Zemach [1991], [1997]）、彼の議論に関する検討はまた別の機会に譲り、ここではこの第三の批判をめぐって以下の点を指摘するにとどめたい。

美的特性傾性理論における観察条件 C および理想の観者 IV の特定可能性を考えるにあたっては、その端緒として、まずは非美的特性（＝物理的特性）を基盤としてそこから直接的に創発する「一次的美的特性（the first-order aesthetic properties）」に的を絞って考察をおこなう必要があろう。すなわち、一次的美的特性にかぎって言うならば、その観察条件 C および理想の観者 IV は、知覚的特性のそれにおおむね準ずるものと考えられるため、それぞれの一次的美的特性に関連づけられる知覚様態にしたがって、それらをかなりの程度特定することが可能であると見なされる（その意味では、一次的美的特性の場合は、「理想の観者」ではなく、むしろ「標準的観察者（standard observer）」と呼ぶ方がより相応しいであろう）。しかしながら、一次的美的特性が当該参照枠のもとに位置づけられることによってはじめて成立する高階美的特性（higher-order

aesthetic properties）（たとえば Walton［2005］において問題とされる藝術的美的特性や Carlson［1981］が取り上げる自然の対象のもつ美的特性がそれにあたる）に関しては、その参照枠への適応を規制する多種多様な条件が数多く考えられることから、観察条件 C はともかく、理想の観者 IV の特定は困難を極める、あるいは端的に言って、その特定はまず不可能であろうとさえ推断される。この点に鑑みるに、傾性理論がその妥当性を保持しうるのは、あくまで一次的美的特性に関してのみであって、高階美的特性に関してはそのかぎりではなく、高階美的特性を充全な仕方で捉えるには、傾性主義のそれとはまた別の理論的道具立てが必要になると考えられる[18]。

3　美的特性に関するスーパーヴィーニエンス傾性理論（SDT）

2.1 に示した美的特性傾性理論に対する三つの批判のうち、第一の批判は、美的特性を傾性として捉えるという傾性理論の核心をなす構想それ自体に対する批判であり、その意味で、他の二つの批判にもまして重大なものと見なされるが、そのこともあってこの第一の批判に対する応接については、独立した節のもとにここであらためて取り上げることにする。

美的特性とは、あくまで顕在的な特性であって、これを本質的に潜在的な特性である傾性と見なすことはできないという第一の批判は、まさに正鵠を射たものと言わざるをえず、そのかぎりにおいて、少なくとも美的特性傾性理論を先に挙げた一連の定式のもとに理解しようとするかぎりは、この批判を斥けることはもとより不可能となる。

この点に鑑みるならば、コリン・マッギンがその論考「色彩に関するもうひとつの見方」（McGinn［1999e］）において展開する議論は、この第一の批判に対する応接としてとりわけ注目に値するものと考えられる。そのタイトルからも明らかなように、彼の論考は本来、美的特性ではなく、伝統的に第二性質（secondary quality）に分類される色彩に関するものなのであるが、対象こそ異にするとはいえ、考察の焦点はそのアプローチ法としての傾性理論それ自体に向けられていることから、彼の議論を本稿の論脈のなかで捉え返し、それを美的特性傾性理論に対する第一の批判への応接として受け取ることにする。

3.1　スーパーヴィーニエンス傾性理論の概要

マッギンは、傾性理論に対する第一の批判への応接として、傾性理論をスーパーヴィーニエンス（付随性）理論として解釈することを提案する（McGinn［1999e］:304）。この解釈によれば、色彩は傾性にスーパーヴィーン（付随）するものと見なされる。したがって、二つの対象が色彩経験を生み出す同じ傾性をもつとするならば、両者は必然的に同じ色彩をもち、また逆に、二つの対象が色彩において異なるとするならば、両者は必然的にその傾性においても異なることになる[19]。このように対象の色彩は、その感覚的傾性（sensory disposition）によって固定されるのであり、したがって、後者における変化なしに、前者における変化はありえないのである（McGinn［1999e］:304-5）。こうして、色彩の基盤（base）はたしかに（そうした色彩として）現出する傾性にあるが、現出するところのものは、傾性そのものではなく、むしろその傾性にスーパーヴィーンする色彩特性であると解されることになる（McGinn［1999e］:307）。

マッギンは、このあらたな理論をスーパーヴィーニエンス傾性理論（supervenience dispositional theory、略して SDT）と呼ぶのであるが、彼によれば、この SDT は、傾性理論のもつ不都合な帰結、すなわち色彩はあくまで、原初的・顕現的な特性であって、傾性のような潜在的特性ではないという第一の批判をかわしながらも、その長所は保持することを可能にする（McGinn［1999e］:305）。

このようにマッギンは、傾性理論にスーパーヴィーニエンス概念を導入することによって、あらたにスーパーヴィーニエンス傾性理論を打ち立てるのであるが、ここでまず確認しておかなければならないのは、SDT にとってその中核概念をなす「スーパーヴィーニエンス」に関するマッギンの理解である。

キムやマクローグリンの論考[20]からも明らかなように、スーパーヴィーニエンスの概念は、そ

れが準拠する理論的枠組が異なるのに応じて多様な理解を許容するものと言え、それらを同列に論ずることはできないのであるが、少なくともマッギンに関して言うならば、彼のスーパーヴィーニエンス概念の理解は、スーパーヴィーンするものとスーパーヴィーンされるものと間の非同一性（non-identity）と非還元性（non-reducibility）にその重点が置かれているものと考えられる（McGinn [1999e]:304, 308）。

この点について簡単に見ておくならば、以下のようになる。

(1)非同一性

A が B にスーパーヴィーンするからといって、A と B が同一であるということにはならない。この点を色彩と傾性との関係において確認すれば、色彩は傾性にスーパーヴィーンするが、だからといって色彩と傾性が同一であるわけではないということになる。

(2)非還元性

A が B にスーパーヴィーンするからといって、A を B に還元することはできない。色彩と傾性の関係に関して言うならば、色彩は傾性にスーパーヴィーンするが、だからといって色彩が傾性に還元されるわけではないということになる。

さて、マッギンの提案する SDT は、「色彩とは傾性である」という傾性理論の基本テーゼを斥けるものであり、そのかぎりにおいてこれを「スーパーヴィーニエンス傾性理論」と呼ぶことには、当然のことながら疑義が呈されることになるが、この点を承けてマッギンは、このあらたな理論の名称を「スーパーヴィーニエンス傾性理論」から「印象主義（impressionism）」へと変更する（McGinn [1999e]:307）。

マッギンによれば、このあらたな名称は、以下の二点を明示するという点で適切なものと言える（McGinn [1999e]:307）。

(1)このあらたな理論は、伝統的な仕方で色彩を感覚的印象（sensory impressions）と結びつける。

(2)このあらたな理論は、色彩特性の本質が色彩経験の内実を介してアプローチされることを強調する。

要するに印象主義とは、色彩帰属をたんに対象がどのように見えるように傾性づけられているかという点に依存させるばかりではなく、色彩の本性は、色彩を帯びた対象がどのように見えるかという点に示されると、マッギンは考えるのである（McGinn [1999e]:307）。

以上、傾性理論に対する第一の批判への応接として、マッギンが新たに提案する SDT（印象主義）についてその概要を見てきたのであるが、それでは、この SDT のもとにわれわれの本来のテーマである美的特性を捉えるとするならば、それはどのようなものになるのだろうか。以下ではこの点について考えてみることにしたい。

上に見たように、色彩に関する SDT の要点は、色彩を傾性としてではなく、傾性にスーパーヴィーンする特性として捉える点にあるのだが、この SDT を美的特性に適用するならば、美的特性は傾性そのものではなく、傾性にスーパーヴィーンする特性であると解されることになる。

この点を踏まえて美的特性に関する SDT を定式化するならば、SDT F1 が得られる。

SDT F1　対象 O は美的特性 P をもつ≡対象 O はある条件 C のもとで P として現出する傾性にスーパーヴィーンする特性をもつ。

また、定式 SDT F1 に対応するかたちで美的特性の定義を与えるならば、SDT D1 が得られる。

SDT D1　美的特性 P＝def. 条件 C のもとで対象 O が P として現出する傾性にスーパーヴィーンする特性

色彩に関する SDT において傾性にスーパーヴィーンする特性をマッギンが「感覚的印象」と呼んでいる点を踏まえるならば、SDT F1 と SDT D1 において問題とされる、傾性にスーパーヴィーンする特性はある種の「現象的特性（phenomenal properties）」であると考えられることから、この点を明示するかたちで SDT F1 と SDT D1 を改変するならば、SDT F2 と SDT D2 が得られる。

SDT F2　対象Oは美的特性Pをもつ≡対象Oはある条件Cのもとで Pとして現出する傾性にスーパーヴィーンする現象的特性をもつ。

SDT D2　美的特性 P=def. 条件Cのもとで対象OがPとして現出する傾性にスーパーヴィーンする現象的特性

この SDT F2 と SDT D2 に関しては、ある意味当然のことながら、ひとつの疑義が呈せられることであろう。その疑義を、SDT F2 に即して示すならば、以下のようになる。、

先に 1.2.1 において F1「対象Oは美的特性Pをもつ≡対象Oは条件CのもとでPとして現出する傾性をもつ」を呈示した際に注解を施したように、F1 の右辺に現れるPは一種の現象的特性として捉えることが可能であるのだが、だとすれば、SDT F2 の右辺に現れるPもまたこれを一種の現象的特性として捉えることが可能となるが、そのときこのPと SDT F2 の右辺に現れる「現象的特性」とは要するに同一のものを指すことになるのではなかろうか。もしそうだとするならば、SDT F2 の右辺は一種の冗語的記述であると言え、その点で明白な欠点が認められる、というのがその疑義である。

結論から述べるならば、SDT F2 の右辺に現れるPと「現象的特性」とは別個のものであり、したがって上の疑義はあたらないということになる。

先に 1.2.1 において F1 を呈示した際に、この F1 に関する注解として言及しておいたのと同じことが、この SDT F2 についても言え、SDT F2 の右辺は、「もし対象Oが条件Cのもとに置かれたとするならば、対象OはPとして現出する」という一種の仮定条件文をその下敷きにしており、したがって、SDT F2 の右辺に現れる「P」は、ある仮定的条件のもとでの潜在的可能態としての現象的特性Pを意味するのに対し、一方の「現象的特性」は当該傾性にスーパーヴィーンすることによって現実化した顕在的現実態としての現象的特性Pを意味するといったように、両者はその存在様相を異にした別個のものと考えられるのである。

このように捉えるならば、一見その欠陥とも受け取られかねない SDT F2 における疑似冗語的記述法は、実は、一方で傾性概念のもつ本質的規定性を保持しながらも、美的特性をあくまで原初的・顕現的特性として規定しようとする SDT の基本戦略を明らかに示すものとして、きわめて注目に値するものと考えられる。

われわれは、1.2.5 において F5「対象Oは美的特性Pをもつ≡対象Oは観察条件Cのもとで理想の観者 IV のうちに美的特性Pと直接的に関連づけられる（たとえばOがPに見える、あるいはOがPであると感じられる）ような経験的反応Rを引き起こす傾性をもつ」を美的特性傾性理論の標準的定式として、また D5「美的特性 P=def. 観察条件Cのもとで対象Oが理想の観者 IV のうちに美的特性Pと直接的に関連づけられる（たとえばOがPに見える、あるいはOがPであると感じられる）ような経験的反応Rを引き起こす傾性」を、その標準的定義として位置づけたのであるが、この F5 および D5 との関連において SDT F2 と SDT D2 とを捉え返すならば、SDT F3 と SDT D3 が得られる。

SDT F3　対象Oは美的特性Pをもつ≡対象Oはある観察条件Cのもとで理想の観者 IV のうちに美的特性Pと直接的に関連づけられる（たとえばOがPに見える、あるいはOがPであると感じられる）ような経験的反応Rを引き起こす傾性にスーパーヴィーンする現象的特性をもつ。

SDT D3　美的特性 P=def. 観察条件Cのもとで対象Oが理想の観者 IV のうちに美的特性Pと直接的に関連づけられる（たとえばOがPに見える、あるいはOがPであると感じられる）ような経験的反応Rを引き起こす傾性にスーパーヴィーンする現象的特性。

念のため申し添えておくならば、この SDT F3 と SDT D3 に関しても、先ほど SDT F2 と

SDT D2 に関して述べたのと同じことが言える。すなわち、それぞれの右辺に現れる「美的特性Pと直接的に関連づけられる（たとえばOがPに見える、あるいはOがPであると感じられる）ような経験的反応R」という記述と、こうした「経験的反応Rを引き起こす傾性にスーパーヴィーンする現象的特性」という記述は、一見同じものを指しているかに見えるが、実はそうではなく、前者がある条件のもとでの潜在的可能態としてあるのに対し、後者は当該傾性にスーパーヴィーンすることによって現実化した顕在的現実態としてあると解されるのである。

F5 が美的特性傾性理論の標準的定式として、また D5 が美的特性傾性理論にもとづく美的特性の標準的定義として位置づけられたことに倣って、ここでは SDT F3 を美的特性に関するSDTの標準的定式として、また SDT D3 をSDTにもとづく美的特性の標準的定義として位置づけることにする。

3.2　実在性概念のあらたな理解に向けて

マッギンは、SDTにもとづくならば色彩は心的でもなければ物理的でもない第三のカテゴリーに位置づけられると主張するのであるが、以下では、ある意味大胆とも言えるこのマッギンの主張をめぐって考察を繰り広げることにしたい。

3.2.1　第三のカテゴリーに位置づけられるものとしての美的特性

伝統的な二元論にしたがえば、すべての（経験的）特性は、心的（mental）であるか物理的（physical）であるか、あるいはその両者の何らかの結合からなるものとして捉えられるが、マッギンによれば、SDTは潜在的にそうした二元論を拒絶する。すなわち、SDTにもとづくならば、色彩は、それがスーパーヴィーンする精神物理学的な傾性（psychophysical dispositions）に還元されることのない、それらとは明確に区別されるグループを形成するのである（McGinn [1999e]:307-8）[21]。

三種の特性、すなわち一階の物理的特性、二階の傾性的特性、スーパーヴィーンする（付随的）色彩特性は、相互に還元不可能ではあるものの、色彩特性を頂点としてその階層序列にしたがって配列される。色彩は、下位レヴェルの特性に依存するにもかかわらず、実際には他のいかなるものにも同化しえない自己固有の存在論的クラスに位置づけられるのである（McGinn [1999e]:308）。こうしてマッギンは、心的特性、物理的特性に加えてさらに色彩が必要になると主張する（McGinn [1999e]:308）。

あらためて言うまでもなく、マッギンの示す、SDTにもとづくこうした理解にしたがうならば、美的特性もまた、これをSDTのもとに捉えるかぎりにおいて、心的でもなければ物理的でもない第三のカテゴリーに位置づけられることになる。

3.2.2　強い実在論と弱い実在論

このように、マッギンがあらたに提案するSDTにもとづくならば、美的特性は色彩とともに、心的でもなければ物理的でもない第三のカテゴリーを形成することになるのだが、ここであらためて問題となるのは、この第三のカテゴリーに包摂される諸特性ははたして実在するものと言えるのか否かという点である（因みに言えば、この第三のカテゴリーのもとに色彩が包摂されるとするならば、色彩とならんで伝統的に第二性質に分類されてきた音や味や香りといったものも、このカテゴリーのもとに包摂されるものと見なされよう）。

この問いに対する答えは、実在性をどのように理解するか、視点を換えれば、いかなるタイプの実在論を採るかによって自ずから異なってくる。

たとえば、心的なものに依存するものの実在を否定する「強い実在論（strong realism）」の立場を採るとするならば、第三のカテゴリーに含まれる特性は実在しないものと見なされることになる。なぜならば、第三のカテゴリーに含まれる特性は、いずれも現象的特性であると考えられるが、現象的特性は必然的に心的なものに依存するものだからである。

これに対して、心的なものに依存するものであったとしても、一方でそれとはまた別に、それがその心的なものから切り離された何らかの物理的基盤をもつものであるかぎりにおいて、その実在を認める「弱い実在論（weak realism）」の立

場を採るとするならば、第三のカテゴリーに含まれる特性は実在するものと見なされることになる。なぜならば、第三のカテゴリーに含まれる特性がスーパーヴィーンするところの傾性は紛れもなく物理的基盤をもつものと言えるからである[(22)(23)]。

以上の議論からも明らかなように、仮に「強い実在論」ではなく、「弱い実在論」の立場を採るとするならば、その場合にかぎり、美的特性に関するSDTを美的特性実在論の一種として捉える、言葉を換えるならば、SDTにもとづいて美的特性を実在する世界を形作るその構成要素として位置づける可能性が拓かれることになる[(24)(25)]。

4 結び

以上われわれは、美的特性に関する傾性理論をめぐって考察を繰り広げてきたのであるが、ここであらめて浮上してくるのは、実在性をいかに理解すべきか、別の角度から捉え返すならば、どのようなかたちで実在論を構想すべきかという問題である。

この問題は、たんに美的特性に関する傾性理論の理解に関わるだけではなく、美的特性実在論と非実在論の理論的枠組み全体にも関わるものと考えられる。本発表の冒頭「0 はじめに」にも示したように、さまざまな種類の美的特性実在論と非実在論は、その可能的類型のもとに分類されるのであるが、こうした可能的類型分類は、あらためて言うまでもなく、それぞれのタイプの実在論をその準拠枠とする実在性概念に完全に相関的であり、仮に、あらたな実在論を構想することで、あらたな実在性概念が打ち出されたとするならば、それにともない、先に示したのとは全く別の（可能的）類型分類が設定されうることになる[(26)]。

美的特性の実在性格について考えるにあたって、可能的タイプも含めいかなるタイプの実在論（非実在論）が妥当なものであると見なされるかという点については、もとより現時点では何ら具体的な方向性も打ち出すことはできないが、少なくとも、それが妥当なものと見なされるためには、その実在論が描き出す世界像は、われわれが現に生きているこの世界の実相・現相を最大限反映したものでなければならないということだけは、ここで確認しておくことができる。

こうして、美的特性傾性理論の美的特性実在論としての可能性を問う問いは、実在論そのものの可能性を問う問いへと回帰し、そこにおいてさらなる深化を遂げることになるのである。

註

(1) Cf. Hermerén [1988], [1993], [1998].

(2) Cf. Zangwill [2001]:200.

(3) Cf. Hopkins [2001], Todd [2004], Blackburn [1993].

(4) Cf. Rubinstein [2006], Cohen [2009]:1-5, Byrne and Hilbert [1997]: xx-xxiv.

(5) ザングウィルは、物理主義的美的特性実在論について以下のように述べている。

「物理主義的美的実在論（physicalist aesthetic realism）の主張はつぎのようなものであろう。すなわち、すべての美的事実は何らかの物理的事実と同一である、あるいは、美的特性の例化（instantiation）はすべて物理的諸特性の例化によって実現されるかまたは構成されるという主張である」、「「美はどこにあるか？」という問いに対して、物理主義的実在論者は、美は物理的世界の一部であると答える。美は物理的事実のある場所に存在するのである」（Zangwill [2001]:177）。

(6) 色彩に関する傾性理論について言うならば、ルビンスタインは、これを色彩実在論のうちに分類しているのに対し（Rubinstein [2006]）、コーヘンによれば、傾性理論には実在主義的なものと非実在主義的なものとの二種があり、その意味で、色彩存在論に関する実在論－非実在論の分類軸は必ずしも有効なものとは言えないことになる（Cohen [2009]:5-6）。

なおモーンドは、本稿で取り上げるような心的なものに依存するタイプの傾性理論を「心理学的傾性主義（psychological dispositionalism）」と呼んでいる（Maund [2006]）。

(7) 傾性の例として挙げられる他のものに、たとえば「絶縁性（insulatibity）」や「毒性（poisonousness）」、あるいは「壊れやすさ（fragility）」などがある。

(8) 傾性概念について詳しくは、Fara [2006]を参照されたい。

(9) 美的特性傾性理論を定式化するにあたって、ここでは以下に挙げた一連の論攷を参照した。Bender

[2003], Pettit [1983], Goldman[1995], McGinn[1998]: 597*l*, McGinn[1999e]:298, Byrne and Hilbert [1997]: xxi.

(10)　ゼマックは、F3 における「観察条件 C」にあたるものを「外的条件（external conditions)」と、また「理想の観者 IV」にあたるものを「内的条件（internal conditions)」と呼んでいる（Zemach [1997]:53)。

(11)　Cf. Rubenstein [2006].

(12)　ここに言う「第一性質（primary quality)」および「第二性質（secondary quality)」は、直接的にはロックに由来する概念であるが、両概念に関する彼の定義的理解に関しては以下を参照のこと。Locke [1853]:76-82.

(13)　Cf. McGinn[1999e]:300-2, [1998] :598*l*.

(14)　Cf. McGinn[1983]:6-8.

(15)　Cf. Byrne and Hibert [2003]:4, Todd [2004]:293, Maund [2006].

(16)　D3-1 においては、「対象 O に関するある種の経験的覚知」という記述をとおして、経験的覚知が対象 O に関連づけられていたが、D5 では、その定義項における「美的特性 P と直接的に関連づけられる（たとえば O が P に見える、あるいは O が P であると感じられる）ような経験的反応 R」という記述をとおして、P を介した間接的な仕方で、経験的反応 R は対象 O と関連づけられることになる。

(17)　Cf. Boghossian and Velleman [1997]:87-90. この論考においては、それが意味論的に空疎であるとの理由から傾性主義的理論に対して批判が加えられるのであるが、ある意味逆説的なことに、ここでの私の議論はそこでの彼らの議論から直接的にインスピレーションを得ている

(18)　一次的美的特性と高階美的特性、および両者の関係、さらには一次的美的特性と知覚的特性との関係について詳しくは、来春刊行予定の以下の拙論を参照されたい。松﨑[2011].

(19)　因みに、「二つの対象が色彩経験を生み出す同じ傾性をもつとするならば、両者は必然的に同じ色彩をもつ」と「二つの対象が色彩において異なるとするならば、両者は必然的にその傾性においても異なる」という二つの命題は対偶関係にある。

(20)　Kim [1993], McLaughlin [1995], McLaughlin [2005].

(21)　ここでの議論は、色彩に関する傾性理論を、物理的なものがもつ傾性と心的なものがもつ傾性との二つからなる「二重傾性理論（double dispositional theory)」として捉えるマッギンの理解が下敷きになっているものと考えられる（McGinn [1999e]:300)。SDT もまた、それが傾性理論を基盤としてそれを改訂した理論であるかぎりにおいて、物理的なものがもつ傾性と心的なものがもつ傾性との二つをその構成要素とするのである。

(22)　マッギンは、「結局のところ色彩は物理的対象のもつ特性である」（McGinn [1999e]:308）と述べるのであるが、マッギンのこの発言は、第三のカテゴリーに含まれる特性が物理的基盤をもつことを明言したものと解することもできよう。

(23)　以下の引用に見るように、ザングウィルは、美的実在論を「強い美的実在論」と「弱い美的実在論」とに分けるのであるが、彼の二分法は、われわれが示した、実在論を「強い実在論」と「弱い実在論」に分ける二分法に直接的に対応するものと考えられる。

「心に依存しない美的特性にコミットするものを強い美的実在論と、また心に依存する美的特性にコミットするものを弱い美的実在論と呼ぶことができよう」(Zangwill [2001]:196)

(24)　McGinn[1999f]において、「色彩は対象の現われ（appearances）を構成する実在性（reality）である」(McGinn[1999f]: 319）と述べていることからも明らかなように、マッギン自身は、色彩を実在的特性と見なすのであるが、このことから逆に推すならば、彼は色彩に関して「弱い実在論」の立場を採っていると考えられる。なお、実在論一般に関するマッギンの理解に関しては、McGinn[1999a]、[1999b]、[1999c]、[1999d]を参照されたい（興味深いことに、実在論一般に関するマッギンの基本的理解は、世界を、それを知るわれわれの手段から独立した存在であるとする理解であり、その意味で、彼の理解するところの実在論は一種の「強い実在論」であると言える。一方で色彩に関しては、上述のように、マッギンは「弱い実在論」の立場を採るのであるが、まさにその点では、マッギンも認めているように、「色彩は例外なのである。」〔McGinn[1999]:2〕)。

(25)　ザングウィルによれば、美的特性に関する傾性理論は実在論に分類されることもあれば、非実在論に分類されることもあるのだが（Zangwill[2001]:178)、これは SDT の性格づけがそうであるのと同様に、美的特性に関する傾性理論の性格づけもまた、それが依拠する実在論のタイプが異なるのに応じて異なることを示している（この点は、SDT があくまで傾性理論を基盤とするものであることを考えるならば、ただちに明らかとなろう)。

(26)　因みに、「0 はじめに」においてその大枠を示した美的特性実在論と非実在論の可能的類型分類は、マッ

ギンの言う「伝統的な二元論」、すなわち、すべての経験的特性を心的なものと物理的なものとに二分する二元論をその基本的分類軸に据えるものであると言える。すなわち、美的特性実在論に分類される立場は、美的特性の（少なくともそのひとつの）基盤を物理的なものに求めるものであるのに対し（ただし「原始主義」に関しては必ずしもそうとは言い切れず、これについてはその位置づけも含め、さらに慎重な検討を要する）、美的特性非実在論に分類される立場はそれを心的なものに求めるものと、まずはおおよそ捉えることができるのである。

参照文献

Bender, John W. [2003]. "Aesthetic Realism 2". In: *The Oxford Handbook of Aesthetics*. Edited by Jerrold Levinson. Oxford / New York: Oxford University Press, pp.80-98.

Blackburn, Simon [1993]. *Essays in Quasi-Realism*. Oxford / New York: Oxford University Press.

Boghossian, P. A. and Velleman, J. D. [1997]. "Colour as a Secondary Quality." *Mind* 98 (1989) : 81-103. Reissued in: Byrne, A. and Hilbert, D. R. [1997]: 81-104.

Byrne, A. and Hilbert, D. R. [1997]. *Readings on Color, Vol.1: The Philosophy of Color*. Cambridge / London: MIT Press.

——— [2003]. "Color Vision, Philosophical Issues about." In: *The Encyclopedia of Cognitive Science*. Edited by Lynn Nadel. Nature Publishing Group.

Carlson, Allen [1981]. "Nature, Aesthetic Judgement, and Objectivity." *JAAC* 40: 15-27.

Cohen, Jonathan [2009]. *The Red and the Real: An Essay on Color Ontology*. Oxford / New York: Oxford University Press.

Fara, Michael [2006]. "Dispositions." In: *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. http://plato.stanford edu/entries/dispositions/.

Goldman, Alan H. [1995]. *Aesthetic Value*. Boulder / Oxford: Westview Press.

Hermerén, Gören [1988]. *The Nature of Aesthetic Qualities*. Lund: Lund University Press.

——— [1993]. "The Variety of Aesthetic Qualities." In: *Aesthetic Quality and Aesthetic Experience*. Edited by Michael H. Mitias. Amsterdam: Rodopi B. V. 1988. Reissued in: *Contemporary Philosophy of Art: Readings in Analytic Aesthetics*. Edited by John W. Bender and H. Gene Blocker. New Jersey: Prentice-Hall, pp.260-7.

——— [1998]. "Aesthetic Qualities." In: *Encyclopedia of Aesthetics*. 4vols. Edited by Michael Kelly et al. New York/Oxford: Oxford University Press. Vol.4, pp.97-9.

Hopkins, Robert [2001]. "Kant, Quasi-Realism, and the Autonomy of Aesthetic Judgement." *European Journal of Philosophy* 9: 166-89.

Johnston, Mark [1997]. "How to Speak of the Colors." *Philosophical Studies* 68 (1992): 221-63. Reissued in: Byrne, A. and Hilbert, D. R. [1997]: 137-76.

Kim, Jaegwon [1993]. "Concepts of Supervenience." Chap.12 in his *Supervenience and Mind*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.53-78.

Locke, John [1853]. *An Essay concerning Human Understanding*. 31st rev. ed. London: William Tegg. 1st published in 1689.

Maund, Barry [2006]. "Color." In: *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. http://plato.stanford edu/entries/color/.

McGinn, Colin [1983]. *The Subjective View: Secondary Qualities and Indexical Thoughts*. Oxford / New York: Oxford University Press.

——— [1998]. "Sedondary Qualities." In: *Routledge Encyclopedia of Philosophy*. 10 vols. Edited by Edward Craig et al. London/New York: Routtedge. Vol.8, pp.595-9.

——— [1999]. *Knowledge and Reality: Selected Essays*. Oxford / New York: Oxford University Press.

——— [1999a]. "Modal Reality." In: *Reduction, Time and Reality*. Edited by Richard Healey. Cambridge: Cambridge University Press, 1981. Reissued in: McGinn [1999]: 65-107.

——— [1999b]. "An Apriori Argument for Realism." *Journal of Philosophy* 76 (1979). Reissued in: McGinn [1999]: 247-66.

——— [1999c]. "Two Notions of Realism?" *Philosophical Topics* 13 (1982). Reissued in: McGinn [1999]: 267-78.

——— [1999d]. "Realist Semanticsand Content-Ascription." *Synthese* 52 (1982). Reissued in: McGinn

[1999]: 279-97.

——— [1999e]. "Another Look at Colour." *Journal of Philosophy* 93 (1996). Reissued in: McGinn [1999]: 298-313.

——— [1999f]. "The Appearance of Colour." In: McGinn [1999]: 314-25.

McLaughlin, Brian [1995]. "Varieties of Supervenience." In: *Supervenience: New Essays*. Edited by E. Savellos and Umit D. Yalcin. Cambridge: Cambridge University Press, pp.16-59.

——— [2005]. "Supervenience." In: *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. http://plato.stanford edu/entries/supervenience/.

Pettit, Philip [1983]. "Aesthetic Realism". In: *Pleasure, Preference and Value*. Edited by Eva Shaper. Cambridge: Cambridge University Press, pp.17-38.

Rubinstein, Eric M. [2006]. "Color." In: *Internet Encyclopedia of Philosophy*. http://www. iep.utm. edu/color/.

Todd, Cain Samuel [2004]. "Quasi-Realism, Acquaintance, and the Normative Claims of Aesthetic Judgement." *BJA* 44: 277-96.

Walton, K [2005]. "Categories of Art". *Philosophical Review* 79 (1970). Reissued in: *Aesthetics: Critical Concepts in Philosophy*. 4vols. Edited by James O. Young. London/New York: Routledge. Vol.2, pp.231-56.

Zangwill, Nick [2001]. *The Metaphysic of Beauty*. Ithaca / London: Cornel University Press.

Zemach, Eddy [1997]. *Real Beauty*. University Park: Pennsylvania State University Press.

——— [1991]. "Real Beauty." *Midwest Studies in Philosophy* 16: 249-65.

松﨑俊之[2011].「美的特性に関する階層構造理論」、『芸術文化』第 15 号（刊行予定）。

本稿は、美学会東部会平成 21 年度第 5 回例会における研究発表（2010 年 3 月 6 日、於北海道大学）にもとづく。